

<巻頭言>



令和3年度を振り返る

平井 秀輝*

新年度に入り、新社長の経営方針や新入社員への訓示を各所で見聞きする時期となったが、頻出用語第1位はDXではないか。昨年度、コロナが牽引役となり、あらゆる業種で急展開したDXであるが、さらなる加速化のメッセージである。昨年9月には「デジタル庁」も設置された。このような中、昨年度はデジタル・ディスラプション現象（DXにより淘汰される企業と進化する企業との二極化現象）が起き、産業内のパワーバランスの大変貌が始まった。さらに昨年度は、コロナとの対峙、日米の首脳交替、東京オリ・パラ開催等々後世の歴史教科書に記載されるようなイベントも満載だった。前代未聞の激動の一年をメディアがどう伝えたか、インフラ整備、防災対策との関連で振り返ってみたい。なお、以下は日刊建設工業新聞「所論諸論」欄に連載しているコラムを再編集したものである。

昨年末、恒例の一年の振り返り番組では、やはり自然災害が多く取り上げられた。ライブさながらの豪雨や土石流の画像、被災者の悲鳴を報じる災害関連番組に昨夏がよみがえったものだ。しかし、雨の降り方までは考察するものの、豪雨への備えや対応・避難等の現状を検証する番組には出会えなかった。昨年の豪雨災害では7月の熱海市での盛土流出が注目されたが、8月の西日本での前線豪雨は全国各地で記録的な雨量となっていた。注目すべきは、総雨量が平成30年西日本豪雨に匹敵していたが、国土強靱化3ヶ年緊急対策による河道掘削や事前放流を含むダム効果により氾濫河川数が7割も減少していた。

インフラ関連の報道では、昨夏も中国の三峡ダムが話題になった。三峡ダムは世界最大の多目的ダムである。一昨年、6月からの三ヶ月に及ぶ長江流域の大洪水で、各地の冠水状況やダムの放流状況がネットで伝えられ「大洪水でダムは間もなく決壊する」との情報があふれた。しかし、識者によれば、実際には巧みなダム放流操作により洪水をカットしたと評価されている。同洪水規模は死者が4,000人を超えた1998年水害に匹敵していたが、死者・行方不明者は300人に及ばなかった。被害規模は着実に縮小している。ニューズウィークによれば、三峡ダム崩壊説に沸いていたのは主として欧米、台湾や日本のメディアで「やはり中国はダメな国だ」とし、引き離された国力の差に敢えて気付かないようにする麻醉として使っていると評していた。三峡

* 一般財団法人 水源地環境センター 理事長、一般社団法人 日本大ダム会議 副会長

ダム崩壊説に惑わされ、インフラの効能さらには中国の進展を見誤ってはならない。

国土交通省では、完了後の事業の効果確認、今後の改善措置、同種事業へのフィードバックなど、将来の事業展開に活かしていくための検証・評価制度を実施している。ダムでは専門家の評価によるフォローアップ制度が四半世紀以上、運用されている。しかし、このようなフォローアップの議論がメディアに取り上げられることは少なく、世間の注目も低い。建設の是非についての議論を取り上げ、加熱していくのとは対照的である。同じ愚行を繰り返ささないため、話題となったプロジェクトの争点について客観的に検証し、そのための評価システムの不断の改善が必要である。また、時に議論を扇動的にさえ報じたメディアには、事業のその後について関心を持って欲しいものだ。

米国のマスコミ研究者によれば、メディアには大衆の注目するアジェンダ設定力があるという。いったんアジェンダとなると、関連する話題を必死に探す。「今ならニュースになる」というわけだ。結果として、普段ならば報じられないような事例が掘り起こされ、特定の話題が報道を独占する。ライター武田砂鉄氏が「メディアは、意見することよりも世論や読者に共感してもらうことを優先する。両論併記したり、批判の対象とならないような締めくくりは、批判の主体となる責任を放棄している」と述べている。メディアには意見がないので、設定を下ろせばたちまち世間から忘れ去られる。

昨年東京オリ・パラでは、世論調査で開催反対が8割にも上り、中止を求める社説を掲載して世間の注目を集めたメディアまで出た。世論の気配を窺わない政府やメディアの議論を期待したが、結局うやむやのままオリ・パラは開催された。メディアのみならず日本中がアスリートの活躍に感動し、日本のメダルラッシュに沸き返り、開催前の議論はまるで封印されたかのようである。昨夏以降、事後検証に正面から向き合う報道には巡り合っていない。年末のオリ・パラ振り返り番組もメダルラッシュの特集が目につき、今や北京オリ・パラが東京オリ・パラを上書き状態だ。東京オリ・パラのレガシー構想が策定されているが、真のレガシーとは、負の遺産も含めて客観的に見つめ直すことから生まれるのではないか。インフラ施設も長短様々な観点からの客観的検証・評価を添えて、次世代へ贈りたいものだ。

次世代に贈りたい英国ガーディアン紙記者のコメントがある。「東京2020大会取材して最初に言うべきことは、この街の人々が必要のない訪問者に非常に寛大で忍耐強かったことだ。この状況下で受けた親切と感染防止のための行動監視は忘れられない思い出になった。」